



〈製鉄炉に炭を入れる様子〉

イベント「古代の鉄づくり」

11月3日(土)に、まほろんイベント「古代の鉄づくり」を行いました。震災により1年延期を余儀なくされましたが、製鉄炉を1ヵ月かけて作り上げて操業することができました。

朝8時30分に製鉄炉に火入れを行い、木炭を次々に入れながら、製鉄炉の温度を徐々に上げていきました。また、木炭の投入と同時に踏みふいごにより風を送り、炉内温度を高めたところで鉄の原料である砂鉄の投入を行いました。イベントでは事前に番子の申し込みにされた方とまほろん森の塾生に、炎が舞う炉内に炭入れと砂鉄入れの作業を体験していただきました。また、製鉄炉の内部に風を送る踏みふいごは、多くの番子さんたちに和太鼓の音に合わせて踏んでいただきました。

お昼を過ぎた頃、投入した砂鉄の溶け具合を確認するため炉の下の方に開けた穴から炉の中を鉄棒で突いて見ました。炉内は明るく美しい橙色で高温であることは分かりましたが、砂鉄に含まれる不純物が溶け出した「ノロ」の流れ出しを確認することはできませんでした。

製鉄炉の操業は予定の午後7時に終了し、それ以降は炉内で赤々と燃えている炭が燃え尽きるまで風を送り続けました。翌日の午前2時を過ぎた頃、炉内の様子を確認するため鉄棒で再度突いたところ、ほんの僅かですが溶けた「ノロ」が流れ出してきました。これで、製鉄炉内部で複雑な化学反応が起こったことを確認できました。

翌4日(日)には、炉の解体を行いました。炉の底には、大きな堅い塊かたまりができていました。今回のイベントの結果は、今後、常設展示室「みんなの研究広場」で展示する予定です。

体験学習

実技講座「家族で縄文クッキーをつくろう」

「縄文クッキー」とは、縄文時代に人々が食べていたクッキー状の加工食品です。

今回の実技講座（10月13日実施）では、家族2組（計6名）が、栗・くるみ・どんぐりなどをベースに、つなぎとして山芋を用いた“クッキー型”と、これに肉・卵を加えた“ハンバーグ型”の2種類を作りました。

縄文時代の食べ物は、木の実を土器で煮たり、動物の肉を火で焼いたりという印象が強かったようですが、縄文クッキーのような手の込んだ食べ物があったことに、参加者はみな驚いていました。



＜「家族で縄文クッキーをつくろう」の様子＞

実技講座「縄文土器づくり初級編」

本講座は、11月17日（土）に13名の方が参加して実施しました。受講された方々は本物の縄文土器を見本として、初めての縄文土器に挑戦しました。

まず、最初に土器の底の部分をつくり、粘土を紐状にして積み上げ形をつくっていきます。土器の形を仕上げたあと、文様をつけます。

土器に文様を施す際に、本物の縄文土器をじっくりと観察している受講者の姿が、印象的でした。

なお、成形を終えた土器は12月に受講者の参加を得て野焼きを行い、完成品を受講者にお渡ししました。



＜「縄文土器づくり初級編」の様子＞

もちつき大会の様子

12月2日（日）に、まほろんイベント「もちつき大会」を行いました。前日に積もった雪が残る中でしたが、春を思わせるような日和の中、800名を超えるお客様にご来館いただきました。

もちつきは、お正月や祝いごとなどのおめでたい時に杵と臼を使って行われます。杵と臼は弥生時代に稲作とともに大陸から伝えられ、これがもちつきの道具として使われています。昭和の時代までは各家庭でもちつきを行ってきましたが、現在では行うことが少なくなりました。

体験広場で職員による実演のあと、白河市表郷地区に伝わるもちつき唄にあわせて、子どもたちは千本杵でもちをつきました。お米がきれいなおもちに変わる様子は、参加した子どもたちにはとても不思議に感じられたようでした。もちつき体験のあとは、“きなこ”と“あんこ”のおもちをおいしくいただきました。

このほか、つきたてのおもちで地元のボランティアの方による「鏡もちづくり」実演、シーラカンス

の権兵衛さんのお出迎えとタッチ水槽でのヒトデやウニなどに触れられる「アクアマリン移動水族館」、イソップ物語などの世界の名作アニメを上映する「福島県文化センター移動映画会」、わりばしでつくった輪ゴム鉄砲やカルタなどの「昭和の遊び」、大豆から石臼を挽きながら“きなこ”をつくる「きなこづくり体験」、まほろんボランティアによる常設展示室内の「まほろんオリエンテーリング」などもあり、館内は終日大賑わいの1日となりました。



＜千本杵でのもちつき＞

企画展示案内

指定文化財展

「ふくしまの重要文化財X 福島市和台遺跡」

会期：平成 24 年 12 月 22 日（土）

～平成 25 年 2 月 17 日（日）

会場：まほろん特別展示室（入場無料）

まほろんでは、平成 15（2003）年度から国や福島県が指定した埋蔵文化財の紹介を指定文化財展「ふくしまの重要文化財」として開催しています。今回は、阿武隈川を望む台地に形成された福島市和台遺跡を展示します。この遺跡は、縄文時代中期の集落遺跡としては県内最多の竪穴住居跡が発見されており、特に縄文土器は東北地方でも特異な「人体文土器」と「狩猟文土器」が出土しています。

「人体文土器」は、粘土の貼付によって人の全身を表現している土器で、全国的にも非常に珍しいものです。最初は、儀式用の土器として利用され、後に複式炉



＜人体文土器＞

の土器として再利用されたと考えられています。また「狩猟文土器」は、縄文人が狩りをしている様子を表現した土器のことです。中央に立体的な動物、左には弓と矢、右には人間の手足と思われる模様があり、模様の一部は赤い顔料で塗られています。

「狩猟文土器」は長らく北海道から東北北部（青森・岩手県）の縄文時代後期の初頭につくられた東北北部独自の土器であると考えられてきましたが、和台遺跡での発見で、もっと古い時代に東北北部以外の地域でつくられていたことがわかりました。この重要な発見により、「人体文土器」と「狩猟文土器」は平成 17（2005）年に福島県の重要文化財に指定されています。また、和台遺跡は平成 18（2006）年に国の史跡になっています。

今回は、縄文時代中期を中心として栄えた和台遺跡のムラの移り変わりについて焦点を当て、周辺地域との関連性を含めて明らかにします。



＜狩猟文土器＞

本年度のおでかけまほろん

まほろんでは、館外体験学習事業として「おでかけまほろん」を毎年実施しています。今年度は、4月から12月までの9ヶ月間で、昨年度より2校多い、40校の学校を訪問して実施しました。

「おでかけまほろん」は、県内小中学校や特別支援教育学校を対象として、まほろん職員が土器などの考古資料や、体験



学習器材を携えて学校へ出向き、臨場感のある地域の古代史やその時代の暮らし、知恵・技術に関する体験学習などについて、先生と連携して授業等を進めるプログラムです。体験学習のメニューとしては、「いろいろな土器にさわってみよう」・「火おこしに挑戦」・「勾玉づくり」・「弓矢体験」などがあります。これらのメニューを担当の先生と話し合い、授業時間にあった組み合わせをつくって実施します。

「おでかけまほろん」の募集は、毎年2月の初め頃行います。各学校を所管する市町村教育委員会を通して募集文書を配布するとともに、当館ホームページに募集案内を掲載します。申し込み方法は、募集期間内にホームページに掲載される申し込み用紙をダウンロードしていただき、必要事項をご記入のうえ、FAXで申し込んでいただきます。

「まほろん冬まつり」のお知らせ

日時：2月17日（日）午前10時～午後3時

場所：まほろん

冬のお楽しみ、「まほろん冬まつり」を行います。勾玉づくりセット抽選会に、「もみぎり」ファイヤー、昔のお菓子づくり体験（綿菓子）、時代衣装を着て

みよう、などなど。

今年もたくさんのメニューを用意して、みなさんのお越しを待っています。

乞うご期待！



研修だより

考古学と関連科学「年代測定」

考古学では、層位的な発掘調査と自然科学分析のデータを組み合わせる方法で、遺跡・遺物の年代を推定しています。

12月8日(土)の研修は、(株)加速器分析研究所の早瀬亮介氏を講師に招き、科学的な年代測定である放射性炭素年代測定の原理、作業方法、福島県内の測定例を分かりやすく解説していただくとともに、まほろんに隣接する同研究所白河分析センターを訪問し、講師の案内で、測定施設をじっくり見学しました。



＜加速器分析研究所白河分析センターの見学の様子＞

シリーズ収蔵品紹介 15

ヘビの装飾を有する縄文土器

今年の干支は「巳」です。巳という聞こえはいいが、「ヘビ」と言い方を変えてみると、そのグロテスクな姿から人々には敬遠されがちな存在です。

古く縄文人は、いろんな動物を縄文土器の装飾として具象化、抽象化して表現しています。最初にイノシシの顔を前期後半の縄文土器の装飾として表現しましたが、中期になるとヘビなどが登場します。

まほろん収蔵資料の中にもヘビの装飾を有する縄文土器がいくつかありますが、今回は平成21年に国の重要文化財に指定された法正尻遺跡(磐梯町・猪苗代町所在)出土品の中からヘビの装飾を有する縄文土器を紹介します。

この縄文土器は、高さ33.5cmの深鉢で中期初頭に位置づけられ、福島県内でも最も古い部類のヘビの装飾をもつものです。口縁は4単位の波状を成していますが、土器の口の部分に、4匹のヘビの装飾を持っています。ヘビは尻尾がとぐろを巻き、頭の部分が三角形に表現されており、2匹が向き合うように表現されています。三角形の鎌首から「マムシ」を表現したものと考えられます。

縄文人は、その生活の基本を森林などの自然界に

置き、そこからの恵みを糧として生活していました。人々が接触するヘビの中でマムシは、毒を有し、血清のなかった当時は、命を落とすこともあったことでしょう。さらに脱皮をし、他のヘビと違って胎生であることから、再生の象徴とも考えられていたのでしょうか。ヘビの装飾は、東日本の縄文時代中期を通じて土器に表現されていましたが、後期には見られなくなります。(学芸課長 芳賀英一)



只今常設展示室で公開中

まほろんからのお知らせ

まほろんビデオ上映会「日本の手仕事」開催!

日時: 2月9日(土) 13:30~15:30

会場: まほろん講堂

二本松市の「技術の記録」の映像を上映します。

・上映1 「箕(み)をつくる」

・上映2 「蓑(みの)を編む」

貴重な伝統の「技」の記録を、ぜひご覧ください。

ご利用案内

開館時間 9:30~17:00 (入館は16:30まで)

休館日 月曜日(月曜日が祝日・休日の場合はその翌日)、国民の祝日の翌日(土曜日・日曜日にあたる場合は開館)、年末年始(12月28日~1月4日)ただしGW・夏休み期間中の月曜日は開館

入館料 無料(体験学習によっては、材料費が必要な場合があります。)

その他 団体(20名以上)でご利用の場合は、事前にご予約ください。